Osaka Shoin Women's University Repository

『太平記』巻六の構成と展開

谷垣伊太雄

一

鎌倉幕府は、後醍醐天皇を隠岐に配流し、その周辺についての処罰を決定することによって、〝討幕〟という大きな火を消したかに見えた。しかし、その火は、完全に消えたわけではなく、移動しつつ燻り続けた。その種火とも言うべき役割を果たしたのが、楠正成と大塔宮護良親王であった。

『太平記』巻五は大塔宮の動向を記し、一方、巻三において自害と見せかけて赤坂城から姿を消していた正成を、巻六で再登場させる。

巻六の章立(注1)では次の通りである。

一、民部卿三位局御夢想事
二、楠出張天王寺事付隅田高橋并宇都宮事
三、正成天王寺未來記披見事
四、赤松入道圓心賜大塔宮令旨事
五、關東大勢上洛事
六、赤坂合戰事付人見本間抜懸事

第一章は、「夫年光不レ停如二奔箭下流水一、哀樂互替似二紅榮黄落樹一。尓レバ此世中ノ有様、只夢トヤイハン幻トヤイハン。憂喜共ニ感ズレバ、袂ノ露ヲ催ス事雖レ不レ始レ今」と、対句表現を使った抽象的概観で始まる(注2)。次に、①「去年九月ニ笠置城破レテ」、②「先帝隠岐國ヘ被レ遷サセ給シ」、③「後ハ、百司ノ舊臣悲ヲ抱テ所々ニ籠居シ、三千ノ宮女涙ヲ流シテ面々ニ臥沈給フ有様、誠ニ憂世ノ中ノ習ト云ナガラ」、④「殊更哀ニ聞ヘシハ、民部卿三位殿御局ニテ留タリ」との記述が続く。

①は巻三の叙述を承けたものであり、②は巻四を承けつつ、文中

Osaka Shoin Women's University Repository

に年記はないものの、①の「去年九月」（傍点筆者。以下同じ）との対応として「今年三月」の事になる。③では、①と②との結果としての先帝側の一般的状況が述べられ、④では、③の中でも「殊更哀ニ聞ヘシ」例として民部卿三位局親子にスポットライトが当てられる。

民部卿三位局の落魄ぶりは対句表現を使って語られるが、その悲嘆のもとになっているのは、「君」（夫としての後醍醐天皇）と「宮」（わが子大塔宮）とに対する思いである。「御悲ノ遣方ナサニ」長年信仰する北野社に参詣するものの、「此折節武家ノ間モ無憚ニハ非ネドモ」という厳しい現実があるために「尋常ノ青女房ナンドノ参籠シタル由」にせざるをえない。ここでも、「哀古ヘナラバ」と過去の栄光が回想され、それに対しての現在が「イツシカ引替タル」と対照的に描かれる。

ただ、参籠した場面からあとは、「宮」への思いは描かれず、「君」への視線のみが残る。これは、「昌泰ノ年ノ末ニ荒人神ト成セ玉ヒシ、心ヅクシノ御旅宿マデモ、今ハ君ノ御思ニ擬ヘ」とあるように、大宰権帥に左遷された菅原道真と隠岐に配流された後醍醐天皇との共通点に惹かれた展開ゆえのものでもあろう。

念誦の後、涙とともに民部卿三位局が詠歌し「少シ御目睡有ケル其夜ノ御夢」に老翁が現れ、「廻リキテ遂ニスムベキ月影ノシバシ陰ヲ何歎クラン」と書いた短冊を残して立ち去る。民部卿三位局は、巻三において、楠正成登場の夢を自ら解いた後醍醐天皇と同じように、自ら「歌ノ心ヲ案ジ」、「君遂ニ還幸成テ雲ノ上ニ住マセ可レ給瑞夢也」と解釈し、「憑敷思召」したというのである。以下、「誠ニ彼聖廟ト申奉ルハ、大慈大悲ノ本地、天満天神ノ垂迹ニテ渡ラセ給ヘバ、一度歩ヲ運ブ人、二世ノ悉地ヲ成就シ、僅ニ御名ヲ唱ル輩、萬事ノ所願ヲ満足ス。況乎千行萬行ノ紅涙ヲ滴盡テ、七日七夜ノ丹誠ヲ致サセ給ヘバ、懇誠暗ニ通ジテ感應忽ニ告アリ」と、北野天神の霊験が述べられ、「世既澆季ニ雖レ及、信心誠アル時ハ霊鑑新ナリト、弥憑敷ゾ思食ケル」と締括られる。

つまり、この章に登場する民部卿三位局は、先帝ゆかりの悲哀を担った人物としてだけではなく、むしろ、北野天神から先帝還幸の保証を得る人物としての役割の方が大きい。結局、「瑞夢也」と自ら夢を解釈した民部卿三位局について「憑敷思召ケリ」と書かれていながら、更に、この第一章の末文が「弥憑敷ゾ思食ケル」と、重複する形の語句で終わっているのは、現実の世を「澆季」とする巻一以来の認識、その現世において「信心誠アル」という精神的なものに意義（有効性）を見ようとする姿勢をも含めて、作者の論理の枠を示しているものと考えられる。

二

巻三の赤坂城合戦で姿を消した楠正成は、元弘二年四月三日「人夫五六百人ニ兵粮ヲ持セテ、夜中ニ城ヘ入ントスル」湯浅定仏の動きを察知し「悉是ヲ奪取テ其俵ニ物具ヲ入替テ、馬ニ負セ人夫ニ持セテ、兵ヲ二三百人兵士ノ様ニ出立セテ」「同士軍」を仕組んで城

Osaka Shoin Women's University Repository

中に入り込むという〝智謀〟によって、湯浅氏を滅ぼす。

第二章は、三月五日に両六波羅探題となった北条時益・仲時の両人が上洛した事を短く記した後、右の正成の再登場を描く。正成は五月十七日に住吉・天王寺辺に兵を進め、渡部橋より南に陣取る。楠勢の上洛を警戒した京都は「洛中ノ騒動不レ斜。武士東西ニ馳散リテ貴賤上下周章事窮リナシ」という状態となる。しかし、楠勢が動かぬため、六波羅方は「聞ニモ不レ似、楠小勢ニテゾ有覧、此方ヨリ押寄テ打散セ」として、隅田・高橋を「両六波羅ノ軍奉行」とし五千余騎を派兵する。

一方、楠は二千余騎のうち「僅ニ三百騎許」を渡部橋の南に配置する。「是ハ態ト敵ニ橋ヲ渡サセテ、水ノ深ミニ追ハメ、雌雄ヲ一時ニ決センガ為ト也」とあるように、六波羅方が憶測で動いているのに対し、楠正成の方は状況を充分認識した上で「武略ト智謀」（巻三）に基づいて行動するのであるから、結果は予想できる。合戦の次第をまとめると（表1）のようになる。

「軍奉行」としての責務を果たせなかった隅田・高橋は、翌日六条河原に「渡部ノ水イカ許早ケレバ高橋落テ隅田流ルラン」という落書を高札に書かれたため「且ハ出仕ヲ逗メ、虚病シテ居」ざるをえなくなる。

錯覚を繰返す隅田・高橋勢の敗北については、合戦後の六波羅での評定においても、「今度南方ノ軍負ヌル事、偏ニ將ノ計ノ拙ニ由レリ。又士卒ノ臆病ナルガ故也」と分析される。従って、この評定に加わっていた宇都宮治部大輔の出陣は、当然右の反省の上に立っ

（表1）

六波羅方	楠正成方
1、「僅ニ二三百騎ニハ不レ過剰痩タル馬ニ縄手綱懸タル體ノ武者共也」 「ハカ〳〵シキ敵ハ一人モ無リケリ」と隅田・高橋に続いて、五千余騎は橋を渡る。	2、「遠矢少々射捨テ、一戰モセズ天王寺ノ方ヘ引退ク」。
3、「勝ニ乗リ、人馬ノ息ヲモ不レ繼セ、天王寺ノ北ノ在家マデ」追撃する。	4、「思程敵ノ人馬ヲ疲ラカシテ、二千騎ヲ三手ニ分テ」天王寺の東・西門・住吉の松陰から出撃する。
5、隅田・高橋が「敵後ロニ大勢ヲ陰シテタバカリケルゾ」と下知したため、五千余騎は渡部橋を指して退く。	6、「三方ヨリ勝時ヲ作テ追懸クル」。
7、橋近くなり、隅田・高橋は「敵ハ大勢ニテハ無リケルゾ」「返セヤ兵共」と下知したが、混乱した大軍は溺死も多く「殘少ナニ被二打成一テ這々京ヘ」退却。	

Osaka Shoin Women's University Repository

たものになる。

実際、宇都宮は「辞退ノ氣色無シテ」、巻三に登場した折の楠正成のごとく「一人ニテ候共、先罷向テ一合戦仕リ、及二難儀一候ハヾ、重御勢ヲコソ申候ハメ」と「誠ニ思定タル体」で退出し、「武命ヲ含デ大敵ニ向ハン事、命ヲ可レ惜ニ非ザリケレバ、態ト宿所ヘモ不レ歸、六波羅ヨリ直ニ、七月十九日午刻ニ都ヲ出デ、天王寺ヘ」下る。東寺辺までは「主從僅ニ十四五騎」だったのが、都を出る頃には、五百余騎となる。「其志一人モ生テ歸ラント思フ者ハ無リケリ」という描写は、巻三で笠置城を攻略した陶山一族に関する「皆千ニ一モ生テ歸ル者アラジト思切タル」との描写と類似する決死部隊の様子を表わしている。

迎撃する楠側では、和田孫三郎の出撃案を聞いて「暫思案シ」た正成が、宇都宮勢について「一人モ生テ歸ラント思者ヨモ候ハジ。其上宇都宮ハ坂東一ノ弓矢取也。紀清兩黨ノ兵、元來戰場ニ臨デ命ヲ棄ル事塵介ヨリモ尚輕クス」と分析し、更に「天下ノ事全今般ノ戰ニ不レ可レ依。行末遙ノ合戰ニ、多カラヌ御方初度ノ軍ニ被レ討ナバ、後日ノ戰ニ誰カ力ヲ可レ合」として、「明日態ト此陣ヲ去テ引退キ、敵ニ一面目在ル様ニ思ハセ」四五日後に包囲攻撃をして退却させようと結論を下し、自軍を天王寺から退去させる。(注3)

宇都宮勢七百余騎が天王寺へ押し寄せた時、敵は一人もいず、「不レ戰先ニ一勝シタル心地」のした宇都宮は、「本堂ノ前ニテ馬ヨリ下リ、上宮太子ヲ伏拜ミ奉リ、是偏ニ武力ノ非レ所レ致、只併神明佛陀ノ擁護ニ懸レリト、信心ヲ傾ケ歡喜ノ思ヲ成」し、京都へも戰勝報告をする。ただ、宇都宮としては「一面目ハ有體ナレ共」、①更に進攻するには「無勢ナレバ不レ叶」、②「誠ノ軍一度モ不レ為シテ引返サン事モサスガ」という事情のため進退に窮する。

四五日経って、和田・楠側では「和泉・河内ノ野伏共ヲ四五千人駈集テ、可レ然兵二三百騎差副、天王寺邊ニ遠篝火ヲゾ焼セ」、「如レ此スル事兩三夜ニ及ビ」包囲の輪を狭める。これに対し「一軍シテ雌雄ヲ一時ニ決セント志シテ」いた宇都宮は「勇氣疲レ、武力怠デ、哀レ引退バヤト思フ心」が起こる。折しも「紀清兩黨ノ輩」から「僅ノ小勢ニテ此大敵ニ當ラン事」への懐疑、及び「先日當所ノ敵ヲ無二事故一追落シテ候ツルヲ、一面目ニシテ御上洛候ヘカシ」との提案がなされたため、「七月廿七日夜半許ニ」宇都宮勢は天王寺から撤退して上洛し、「翌日早旦ニ」は楠勢が天王寺に入る。

この章に関しては、二つの〝対の方法〟の導入を見る事ができる。一つは、先にも見た如く、六波羅勢内部における、隅田・高橋と宇都宮という人物形象についてである。隅田・高橋の二人は、味方から「計ノ拙」を指摘される情勢判断の甘さ、大軍を充分指揮できぬ統率力のなさを露呈する事によって、落書に戯画化される負の存在(マイナス)である。一方の宇都宮は、決意の強さでは巻三の正成や陶山一族、信心深さでも巻三の正成（長年観音経を読誦していた）や陶山（陶山は攻め込んだ笠置城で「鎭守ノ前ニテ一礼ヲ」忘れなかったし、宇都宮は天王寺の「本堂ノ前ニテ馬ヨリ下リ、上宮太子ヲ伏拜」んだ）に類似する正(プラス)の存在として形象されている。

もう一つは、宇都宮と楠という〝対〟である。これは、宇都宮が

Osaka Shoin Women's University Repository

撤退したあと楠が天王寺に入ったとの記述に続く「誠ニ宇都宮ト楠ト相戰テ勝負ヲ決セバ、兩虎二龍ノ鬪トシテ、何レモ死ヲ共ニスベシ。サレバ互ニ是ヲ思ヒケルニヤ、一度ハ楠引テ謀ヲ千里ノ外ニ運シ、一度ハ宇都宮退テ名ヲ一戰ノ後ニ不レ失。是皆智謀深ク、慮リ遠キ良將ナリシ故也ト、譽ヌ人モ無リケリ」という箇所にも窺えるものである。(注4)

ただ、正と負との〝対〟的構成という前者に対して、この二人の場合は、正と正という〝対〟であるために、一方を勝者とし他方を敗者とするような展開は見せない。(注5)その「引分け」的結末を招来するのが「一面目」という語である。決死の覚悟で京都を出た関東武士宇都宮を支えていたものは、名誉を重んずる「一面目」であった。実戦での勝利がないまま天王寺を引き上げる事ができたのも、この「一面目」ゆえであった。

しかし、この「一面目」は、言ってみれば、楠正成によって演出されたものであった。その意味では、宇都宮が手にした「一面目」は虚像としての名誉であったという事にもなる。

既に、巻三の赤坂城合戦などにも瞥見されたごとく、正成はこの章においても「天下の事全今般ノ戰ニ不レ可レ依。行末遙ノ合戰ニ、多カラヌ御方初度ノ軍ニ被レ討ナバ、後日ノ戰ニ誰カ力ヲ可レ合」と、現実重視の発想を持つ人物として形象されており、それは「和泉・河内ノ野伏共ヲ四五千人」動員しうるような側面にも繋がりを見せる。そのため、再び天王寺に出陣した正成は「威猛ヲ雖レ逞、民屋ニ煩ヒヲモ不レ為シテ、士卒ニ禮ヲ厚ク」する事で「近國ハ不レ及レ申、遐壤遠境ノ人牧マデモ、是ヲ聞傳ヘテ、我モ〳〵ト馳加リケル程ニ、其勢強大ニ」なりえたのである。

このように見てくると、宇都宮と楠との〝対〟的構成は、作者の書く「兩虎二龍」というような対等なものではなく、宇都宮が楠の掌中にあって、指のごとき楠と対峙している構図として考えるべきであろう。(注6)

三

第三章は、第二章でその正(プラス)としての存在が拡大的に確認された正成が、住吉神社および四天王寺に参詣し、敬虔な姿勢を見せるとともに、四天王寺において聖徳太子の手になる「日本一州ノ未來記」を特別に見せてもらい、「不思議ノ記文」を「不思議ニ覺ヘテ、能々思案シ」、北条氏の滅亡ならびに後醍醐天皇の隠岐からの還幸が「明年ノ春の比」である事を確信して「懸敷覺」えたという話。

第一章での北野天神の保証が、今度は聖徳太子によって確約された形になり、その上、「後ニ思合スルニ、正成ガ勘ヘタル所、更ニ一事モ不レ違、是誠ニ大權聖者ノ末代ヲ鑒テ記シ置給シ事ナレ共、文質三統ノ礼變、少シモ違ハザリケルハ不思議ナリシ讖文也」と、後日譚まで付けられる事によって、後醍醐天皇の隠岐からの還幸が確定的に語られてしまう事となる。

なお、第二章・第三章とも、巻五第四章(注7)において、北条高時の奇行に関して刑部少輔仲範が「如何様天王寺邊ヨリ天下ノ動亂出來テ、

Osaka Shoin Women's University Repository

國家敗亡シヌト覺ユ」と述べた予言の実現でもあった。

第四章は、大塔宮の令旨を受けて挙兵した赤松入道円心の事が短く語られる。巻三における「河内國金剛山ノ西ニコソ、楠多門兵衛正成トテ、弓矢取テ名ヲ得タル者ハ候ナレ。是ハ敏達天王四代ノ孫、井手左大臣橘諸兄公ノ後胤」と類似する「播磨國ノ住人、村上天皇第七御子具平親王六代ノ苗裔、從三位季房ガ末孫ニ、赤松次郎入道圓心トテ弓矢取テ無雙勇士」という紹介のされ方である。

ただ「元來其心闊如トシテ、人ノ下風ニ立ン事ヲ思ハザリケレバ、此時絶タルヲ繼廢タルヲ興シテ、名ヲ顯シ忠ヲ抽バヤト思ケル」とあるが、「此二三年大塔宮ニ屬纒奉テ、吉野十津川ノ艱難ヲ經ケル圓心ガ子息律師則祐」が携えてきた大塔宮の令旨に添えられていた「委細事書十七箇條ノ恩裁」を見た円心は、「条々何レモ家ノ面目、世ノ所望スル事ナレバ」「不レ斜悦デ」との記述から見ても、その挙兵の大義名分には現実的な裏打ちのある事もわかる。

楠の炎は、天王寺辺で火力を強め、大塔宮の放った火は、遥か離れた西播磨の赤松円心に燃え移って「西國ノ道止テ、國々ノ勢上洛スル事ヲ得ザリケリ」という状況をつくりだす。

四

第五章では、第二章・第四章における先帝側の動きに関して「畿内西國ノ凶徒、日ヲ逐テ蜂起スル由、六波羅ヨリ早馬ヲ立テ關東ヘ」注進があったため、幕府としても「サラバ討手ヲ指遣セ」という事になり、「相摸守ノ一族、其外東八箇國ノ中ニ、可レ然大名共」を中心に「宗トノ大名百三十二人、都合其勢三十萬七千五百余騎」が九月二十日に鎌倉を出発する。その他、四国・中国地方をはじめ「摠ジテ諸國七道ノ軍勢」が京都に集結する。

その軍勢八十万騎は、元弘三年正月晦日に「三手ニ分テ、吉野・赤坂・金剛山、三ノ城ヘ」、①吉野へは二階堂出羽入道道蘊を大将とする二万七千余騎、②赤坂へは阿曽弾正少弼を大将とする八万余騎、③金剛山へは陸奥右馬助を「搦手ノ大將」とする二十万騎が派兵される。ただ、この章では、③の「侍大將」として「大手」に向かった長崎悪四郎が、わざと「己ガ勢ノ程ヲ人ニ被レ知ト」思い「一日引サガリテ」「其行妝見物ノ目ヲゾ驚シケル」という事に関しての詳しい描写が中心となっており、合戦の具体的な展開に関しては、①と③は巻七に譲られる。

第六章は、右の②を詳述したものである。この章の「人見本間抜懸事」の箇所については以前採り上げた事があるので、(注8)問題点の確認にとどめたい。

第二章～第四章の先帝側の正(プラス)の動きに対して、第五章における幕府側の大軍の動員も、一見正(プラス)に見えるが、第六章での実戦になると、必ずしもそのままの展開は見せない。

たとえば、大将より禁止命令の出ていた「抜懸」を敢行した人見四郎入道恩阿の言葉の中には幕府・北条氏の限界が語られており、阿曽の軍勢八万余騎も「大勢ナレバ、思侮テ」多数の死傷者を出す。最後は、「播磨國ノ住人吉河八郎」の進言によって赤坂城の水路を

Osaka Shoin Women's University Repository

断ち、城側の平野入道以下二百八十二人を降参させる事ができたものの、「合戦ノ事始ナレバ、軍神ニ祭テ人ニ見懲サセヨトテ、六条河原ニ引出シ、一人モ不レ殘首ヲ刎テ被レ懸」たため、「吉野・金剛山ニ籠リタル兵共モ、弥獅子ノ齒嚼ヲシテ、降人ニ出ント思フ者ハ無リケリ」という決意をさせる事となり、攻撃側の完全な勝利という語り口にはなっていない。

更に、そのあとに続く「罪ヲ緩フスルハ將ノ謀也ト云事ヲ知ラザリケル六波羅ノ成敗ヲ、皆人毎押ナベテ、惡カリケリト申シガ、幾程モ無シテ悉亡ビケルコソ不思議ナレ。情ハ人ノ為ナラズ。餘ニ憍ヲ極メツヽ、雅意ニ任テ振舞ヘバ、武運モ早ク盡ニケリ。因果ノ道理ヲ知ルナラバ、可レ有レ心事共也」との末文(注9)は、教訓を含みつつ今後の展開を先取りして幕府側の負(マイナス)を強く語っている。

五

ところで、第二章の天王寺合戦記については、今井正之助氏(注10)が、「日付」記事を史実と比較し、「史実よりも七ヶ月も早く活動している」正成について、「『太平記』が、元弘二年三月七日の後醍醐隠岐遷幸後の空白を嫌い、直ちに正成が一人反幕府運動を再開したとするための、意識的な虚構であろう」とされた。

又、長谷川端氏(注11)も、『太平記』と『楠木合戦注文』との比較によって「正成の第二次の挙兵・合戦は、太平記においては約七カ月早められている」ことを確認し、正慶二年(元弘三年)一月の「和泉・河内合戦」が省略されている事も含めて「太平記における虚構だと判断」された。更に、『太平記』作者が「宇都宮に代って正成を天王寺へ入れた」理由は、「正成が太子未来記を読んで、後醍醐天皇の還幸、北条幕府の転覆そして建武の天皇政治の実現を確信する必要があるからであり、そのため正成は天王寺に戻らねばならなかったのである」とし、「太平記の作者は、北条政権を倒し時代を変革するに相違ない人物として正成像を構想し、読者・聴者の抱く太平への期待を形づくるために、正成の「不思議」な戦法だけでなく、「天狗山伏」のイメージや正成の怨霊すらも動員している」こと、天王寺合戦における「史実の歪曲も、こうした面から考えるならば、必然性をもった作為だと言える」と述べておられる。

大森北義氏(注12)は、今井・長谷川氏の論考を「構想について考える場合重要である」とした上で、「天皇の〝「聖運」を開く〟と述べて巻三に登場したあの人格が、ここ〝元弘の内乱〟始発の時点に再登場したことを位置づけようとする」正成についての「構想上の位置と役割に注目」し、巻六前半部(流布本の第一～四章。筆者注)を、「1　後醍醐の後宮の悲しみと、後醍醐〝復権〟の予告」「2　正成、天王寺に現れ、六波羅軍と合戦(〝天王寺合戦〟)」「3　正成、天王寺の〝未来記〟をみて、〝天下の動乱〟と〝先帝の復権〟を予測」という記事(章段)の構成から成るとし、正成像について「第一部世界のその構想を支える二つの方法(注13)とも密接にかかわるところの典型として位置づけることのできる人物である」とされた。

「序」に始まり、巻一から巻六までに範囲を限定しても、『太平

Osaka Shoin Women's University Repository

記』作者は、三氏が述べておられるような「構想」のもとに、今、仮に纒めるとすれば、①「概観・要約」、②「展開」、③「批評」、④「予言」等を組合わせて、物語を進めていると言えよう。巻六の場合、第一章は①と④、第二章は②、第三章は④、第四章は②、第五章は②、第六章は②と③と④によって、それぞれ構成されていると見る事ができる。勿論、単純に分類する事はできないが、①や④は、物語中の巻を越えて、あるいは巻を連接するべく導入される文学的方法であり、③とともに、さほど長文にはならない。一方、②は①や④に基づいて具体的に語られるために相当長文になる事が多い。ただ、同じ「展開」でも、第二章や第六章の大部分のように詳述される場合と、第四章や第五章のように、「展開」に進んで行くための「始動」・「繋ぎ」・「経過」とでも言うべき要素を持ったものもあり、それらは比較的短いものが多い。又、故事が引用されるのは①や④に多く、③や「論述」「解釈」などの場合に先例としての故事引用が見られる事もある。そして、④は神仏の霊験譚と結びつく場合が多い。

長谷川氏の言われる「楠正成の合戦譚の類型化」(注14)という事も、本稿で言及してきた人物形象における類似性などの問題とともに、右に呈示した、物語を組み立てる文学的方法と関連させて考察すべき事ではないだろうか。

結局、巻五においては北条高時個人のものとして語られる傾向にあった負(マイナス)の要素が、巻六においては、三氏の論考の中にも見られるごとく、幕府全体・武士集団に及ぶ形で拡大されて行き、一方、それとは対照的に、先帝側が、多少の敗戦を経ながらも正(プラス)の傾向を強めて行っている事を読みとることができよう。

(注)

1 引用は日本古典文学大系本(岩波書店)による。

2 西源院本には、この一文がない。

3 大森北義氏は、その著『『太平記』の構想と方法』(明治書院・昭和63年3月30日)の第二章第三節において、この様な正成の事を〝退く良将〟と表現しておられる。

4 西源院本は「也」で終わっている。

5 たとえば巻三においても、楠と陶山一族との対決はなかった。

6 長谷川端氏は、その著『太平記の研究』(汲古書院・昭和57年3月31日)のⅢにおいて、「宇都宮公綱が、正成との天王寺の戦いにおいて干戈を交えずに武将としての名を全うした、と評価するなどは多分に前時代的ですらある。公綱が礼儀正しく、坂東一ノ弓矢取であり、命を塵介よりも軽しとし、天王寺の廟に詣でる武将であったからであろうか」と述べておられる。

7 「相摸入道弄二田樂一幷闘犬事」

8 『太平記の説話文学的研究』(和泉書院・一九八九年一月三一日)第二章。

9 西源院本にはない。玄玖本はあるが、鈴木登美恵氏は「別筆の補入」とされる(「尊経閣文庫蔵太平記覚え書」〈「國文」第14号・昭和35年〉)。

10 「正成一人未ダ生テ有ト聞食候ハ―『太平記』における楠正成の位置―」(「国語と教育」第3号・昭和53年)。

11 注6の著書・Ⅳ。

12 注3の著書・第一章第四節。

13 大森氏は、〝「序」の方法〟と〝「不思議」の方法〟を『太平記』における「二つの方法」とされる。

14 注6の著書・Ⅲ。